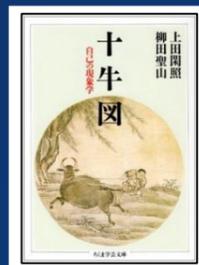


ベスト オブベスト

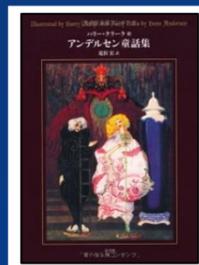
読書週間の季節になりました。今年も特別企画として篠崎図書館の全スタッフが本をご紹介します。今回のテーマは「ベストオブベスト」。スタッフそれぞれがこれまでの読書遍歴の中でこの本は特別、という一冊を集めました。



『十牛図』

上田 閑照ほか著
筑摩書房
B188カ
小岩所蔵

十牛図は十枚の図からなります。牛は人の心もしくは悟り、童子を修行者と見立てます。今の自分はどこなのか、たまに気にするときに手に取ります。良いことをしても後に引かない、誰にも振り向かれない人間ってなかなかないな、といっ読んでも思います。



『アンデルセン童話集』

アンデルセン著
新書館
949ア
篠崎ほか所蔵

懐かしいおとぎ話が荒俣宏の新訳で読めると知り発売とともに書店に急ぎました。「贈り物ですか」とレジで問われたこの本はまさに大人になった自分へのプレゼント。H・クラークの妖しい挿絵がちりばめられた夢のような一冊は、今も本棚の特等席にあります。



『流れる星は生きている』

藤原 てい著
中央公論新社
B916フ
篠崎ほか所蔵

太平洋戦争終結の直前に、旧満州から幼い子供3人と共に引き上げてきた著者。その壮絶な行程に、よくぞ腐ることなく苦難に耐え生還したと、彼女らの生命力の強さに感動しました。また、今の平和な世の中に感謝するとともに、守っていかなければと思う一冊です。



『ザ・パワー』

ロンダ・バーン著
角川書店
159ハ
中央ほか所蔵

どのようにしたら幸せに生きられるのかが書かれています。私の尊敬する人がまさに本書のような愛溢れる人物なので、この本を読んだ時その内容に非常に納得しました。とてもわかり易いストレートな文体で語られており、著者の発信するメッセージは心地よく心に届きます。



『可愛い女・犬を連れた奥さん』

チュー・ホフ著
岩波書店
B983チ
篠崎ほか所蔵

自分というものを無くし、好きな相手と全てにわたって同化しようとする主人公の生き方には、賛否両論あるでしょうが、彼女の生き方に「No!」と言う人とは絶対に友達になりたくない。それほどこの短編に惚れ込んでいます。人を愛する事に悩んでいる人は、ぜひ!



『ポピュラー音楽理論』

北川 祐編著
リットーミュージック
V767.7キ
中央ほか所蔵

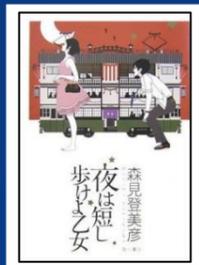
昔、数ある理論書の中から直感で選んだ本(実際には旧版)。解らない所は、他の本で理解をしてから繰り返し読んでいた。『ポピュラー〜』というタイトル通り、的を絞ったとても良い本だと今でも思う。音楽理論の入門書としてオススメです。



『うめ婆行状記』

宇江佐 真理著
朝日新聞出版
Fウ
篠崎ほか所蔵

昨年急逝された宇江佐さんが小説に描いたのは、ほとんどが私達の生活とどこかで繋がっているようなありふれた日常です。そこに根ざした哀歓をこそ大切に描き続けた作家でした。本作も、老境を迎えたいうめの生き様が読者に何かを与えてくれる気がしてなりません。



『夜は短し歩けよ乙女』

森見 登美彦著
角川書店
Fモ
篠崎ほか所蔵

のめりこむ小説ほど登場人物の身体感覚を共有する。痛かったりドキドキしたり。そしてこの作品は私が「読んだだけ」で二日酔いになった唯一のものである。延々続く宴の描写がすごい。しかし本筋は青春純愛ストーリーなので未成年の諸君も安心して読んでほしい。



『猿蟹合戦』(『芥川竜之介全集5』所収)

芥川 竜之介著
筑摩書房
B918ア5
篠崎ほか所蔵

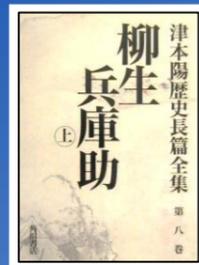
昔話の猿蟹合戦を芥川流に語るとどうなるのか。わずか数ページほどの短い文章ですが、読めばそれまでのおとぎ話の常識が覆ります。昔話を近代の常識に当てはめて考えるとこうなるのかと、思わず唖ってしまった作品です。



『これが私の優しさです』

谷川 俊太郎著
集英社
B911タ
篠崎所蔵

母校の校歌を谷川さんが作詞したと知り、彼の作品に触れてみたくなって読んだのがこの本。谷川さんの詩は世界観が壮大で、自分の存在が小さなものに感じられます。だからこそ、悩んでいるときなどに読むと気持ちが軽くなります。心を癒してくれる大切な一冊です。



『柳生兵庫助 上・中・下』(『津本陽歴史長篇全集』8~10巻所収)

津本 陽著 角川書店
Fツ8~10
篠崎ほか所蔵

廻国修行で忍者や様々な流派の剣豪と戦い、尾張徳川家の兵法師範となった新陰流第三世・柳生兵庫助の生涯を描いた小説。常に鍛錬を怠らず、剣術の工夫をした姿に感銘を受けました。剣豪小説が好きで色々読み漁りましたが、読んで一番熱くなった作品です。



『東京タワー』

リー・フランキー著
扶桑社
Fリ
篠崎ほか所蔵

かつてベストセラーとなった、作者の自伝的小説。九州弁のさりげない会話が絶妙。誰にでも訪れる親との別れ。何度読み直しても「ママンキーのひとりごと」に泣かされます。「元気にしてる？」と母と話をしたくなる本です。



『疎開した四〇万冊の図書』

金高 勲著
幻戯書房
016カ
篠崎ほか所蔵

著者は江戸川区生まれの映画監督で同タイトルのドキュメンタリー映画(※)も制作しています。太平洋戦争の最中、都立日比谷図書館の蔵書を空襲から守るために本の運搬に駆り出された学生や図書館員のインタビューなど、どんな本がどの様に守られたのかが詳細に描かれています。



『土を喰う日々 わが精進十二ヵ月』

水上 勉著
新潮文庫
B596ミ
篠崎ほか所蔵

作家・水上勉が、自ら畑で野菜を育て、その収穫で日々の料理を工夫する様子を月ごとに述べたエッセイ。著者が少年の頃にすごした京都の禅寺での典座経験が基になっていて、読むたびに、食材を無駄なく使い美味しくいただく心、姿勢の大切さに気づかされます。



『運命の海に出会って』

マーティン・ジェザー著
ほろぶ出版
289.3カ
篠崎ほか所蔵

レイチェル・カーソンが文学的才能と海洋学者としての優れた知識を融合させて発表した『沈黙の春』は、環境汚染を告発した寓話的作品です。当時エコロジーという概念がなかった世界に大きな衝撃を与えました。本書には清廉な彼女の使命感に駆り立てられた人生が綴られています。